

光輝く二人

愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文

20年ほど前、愛知淑徳高校の姉妹校で

オーストラリア、メルボルンにあるセント
キャサリン校からの留学生フェリシテイの
ホストファミリーとなりました。17歳のフェ
リシテイは心優しく、ご飯が大好きで、白
いご飯をおかずなしで食べたり、私が煮物
の魚の頭を食べると泣き出したりするよ
うな娘でした。

帰国後、フェリシテイはメルボルン大学
で学び、技術者として三菱重工に就職し

再び名古屋にきました。

フェリシテイのお父さんは公認会計士
でトヨタ系企業などのアドバイザーを引
き受けており、名古屋にもよくこられ、時
には夫婦でこられることもあり、家族同
士の付き合いとなりました。

フェリシテイは日本で充実した社会人
生活を送っていましたが、大学時代に知り
合ったピーターと結婚することとなりま
す。「日本のお父さんお母さん」と記され
た結婚式の招待状の表(左上写真)には、
デイビッド・ピスコムテのことが記され
ていました。

To love and be loved is to feel the
sun from both sides

「愛し愛されることはお互いが光を与え、
お互いがその光を感じる」とでも訳せ
ましょう。

二人は共に太陽なのだ、と大らかに言
い切る表現は、日本の奥ゆかしい「夫婦は
空気のようなもの、普段は気にしないが、

お互いになくってはならない」とのコントラ
ストを感じます。

フェリシテイは結婚後、ピーターが住む
ドイツにあるドイツ日産に転職し、テスト
ドライバーになります。スピード制限のな
いドイツの高速道路を200〜300キロ
のスピードで走り、車の性能をチェックし
ていましたが、5年ほど前、ドイツ日産を
退職しイギリスのオックスフォード大学へ
の入学を決断します。すると今度はピー
ターがイギリスの会社に転職します。
オックスフォードでMBAを取得した
フェリシテイは今ロンドンで自動車関連
企業のコンサルタントとして大活躍をし
ています。

*

昨年、クリスマス休暇で日本にやってき
たフェリシテイとピーターと、私の娘家族
を交えて、炊きたてご飯が美味しい料亭で
食事をしました。第一線のビジネスパー
ンでありながら、少しもおこることなく、

大人の会話についていけない中学3年の
孫娘に、たとえとしくなった日本語わか
りやすい英語で話しかけてくれたり、大き
なイギリスの伝統的なクリスマスケーキを
飛行機の手荷物で運びプレゼントしてく
れたりする心優しいフェリシテイ。技術者、
テストドライバー、コンサルタントと自分
の道を力強く切り開いてきたあの泣き虫
だったフェリシテイを誇らしく思いました。
食事後、クリスマスイルミネーションに
飾られた街を歩むフェリシテイとピーター
は共に光輝いていました。

*

コロナも落ち着き、久し振りにオーケス
トラや合唱がある高校の卒業式でこの話
を紹介し「自分の信じる道を自分で切り
開いていって下さい。そして、誰かの光とな
れたり、誰かの光を感じられる生き方を
貫いていただけることを願っています」と
語りかけました。

